

だ、船に乗れる船に乗れる、これでいまこそ日本へ帰れるのだ。

引揚者の中には夫が父が又妻が母が、欠けているのが普通なのだ、いざ乗船となるとその悲しみが身に迫る。皆んな涙の乗船だ、タラップを上る一人一人に、戦争の悲しみがこれ程強く印象づけられる姿はないであろう。特に母の遺骨を抱きしめて、大陸を流れ流れてやっと引揚船のタラップを、いま上りゆく孤児の姿には、皆声をあげて泣いた。

船はリバティ型V〇二十号、乗船者二千五百人、内宮城隼人七十一人であった。正午乗船完了、直ちに出港。ドラが鳴った、私共はコロ島と満州の山々に、最後の別離の手を振った。

コロ島の山々は遠ざかる、皆んな申し合わせたようにラバウル小唄の替え歌で、「さらば満州よ又くるまでは」と、いつまでも手を振り乍ら唄い続けた。

栄光の座から奈落の底へ

東京都 中村 八郎

ソ連が日ソ不可侵条約を無視して、手薄なソ満国境を破竹の勢いで、南下してきました。その頃所用があつて、哈雨浜道外を、車で通過しましたが、今まで、軒なみにはためいていた日の丸の旗と五味共和の満州国旗が、ソ連の赤い星の旗と晴天白日旗にとって代わっていたのです。

異様な光景に、直接の殺意が感じられなかったものの、背筋が硬直したのは、私一人でなかったと思います。そして一週間後に終戦となりました。

昭和二十年八月十五日、あちこちで満人の暴動が occurred。八月十六日には、哈雨浜の主な機関が、ソ連軍に接収されました。八月十七日には、機甲部隊が入城してきました。

戦火からのがれた開拓団の人達が哈雨浜に集積された。やつれた、うつろな目で、牡丹江から、チチハルから、

チャムスから……。八月二十二・三日頃から、日本人狩りが始まりました。逃亡日本兵を、さがすためだとのことでしたが、男子という男子は珠珠になって、香坊の方に連行されました。家の中を、夜さがしをして、アルバムの中から兵隊さんの写真を見つけると、これはお前だといって銃殺にするという光景もありました。大半の男性は屋根裏、天井裏に身をひそめ、時のたつのを待っておりました。

男のいない女と子供だけの日本人家屋、終戦から十日間……虚脱感からやっと自分をとり戻したとき、始めて敗戦のじめさ、むなしさ、そして祖国日本の、あの幼い頃の郷里が思い出されてきました。自分には家族があるんだ。独りっきりでないのだ。この家族の為にも、強く生きぬいて、日本に帰る日をつんだ。……海外にいる、当時の日本人の心境ではなかったでしょうか。

街の中も静けさが戻ったが、日本人という日本人は職場が、ボイコットされ、いかにして引き揚げの日まで、生きぬくかということでした。さいわい在哈雨浜の日本人は、いつになるか、わからないが、当分食いつないで

いける。このほかにわれわれ在哈雨浜の日本人として、連日奥地の開拓団や、都市を追われて、着のみのままで、哈雨浜に、たどり着く難民の救済を、どうするかが、焦眉の急でなかったでしょうか。各家庭から日本円が集められ、これを債券として、日本に帰ってからと募金が始まりました。

難民は私達のいた、馬家満満鉄社宅の前にある、花園小学校、道裡の桃山小学校に収容されたが、十月にもなると、日本でも想像もできない、冬將軍となる。十二月、一月零下三十度。飢えと寒さのため、老若男女を問わず、死人の山となりました。市当局も事務的に車に氷の死人を運び去る日々が続きました。

私も日本難民救済会の許可を得て、救済会の吊旗をたて、哈雨浜駅舎の一部屋で、これらの難民のために食糧の供給を始めました。なけなしの金をはたいて買い求める食糧、又私達も命がけで道外の市場に仕入れに行く毎日引き揚げまで続いたのも、職場に戻れない、日本人の中で、最後まで稼働できた自分が幸いだったと思っています。

季節がめぐって、哈雨浜にも春がやってきたが、この頃になると、ソ連兵も撤兵し、代わりに中国兵が街の治安のためやってきたが、それもつかの間、蒋介石の兵と共産軍、八路軍とが、衝突を始めたとのこと。そして哈雨浜より南の、第二松花江の鉄橋が爆破されたとの情報が入ってくる。

終戦の一年目がやってきた。この頃になると、やっと日本にわれわれも送還されるとの明るいニュースが流れた。一人が一万二千円宛持参してよろしい。博多についたら日本円壹千円を渡すとのことで、八月三十一日哈雨浜駅前に集合、無蓋車の人となったが、案の定、第二松花江まで来たら、汽車がそれ以上進まない。松花江南の駅まで徒歩と舟での渡河となりました。歩く距離は約四キロぐらいあったでしょうか、暑さと栄養失調のため、幼い児が息たえた。その親は、その場に穴を掘り、埋葬した光景も見た。後髪をひかれる思いであつたらうと思われる。日本に引き揚げる直前に、このように命をなくした日本人も、数多くいたことを明記し、これら人びとのご冥福を祈りたい。

命令の陸路帰国——虐待に命がけ

山梨県 石川 武

むごい民主連盟員の扱ひ

九月三十日（昭和二十一年）午前六時半、私は『日僑遣送安東第十七大隊通訳』という腕章を巻いて、駅前広場に集まった。六個中隊、二十四小隊、全市からの准難民千五百人は、重留大隊長を先頭に安東駅の保税倉庫に向かった。

銃剣ものものしい八路兵の廠戒のうちに、民主連盟員による嚴重な荷物の検査が行われた。禁制品や国弊を捜し、握り飯を割りパンをさいてまでして発見しようとする。八路軍票は奉天では使えないことがわかつている。邦人が物を売り、働いて作った血の出るような国弊を、下駄の鼻緒や水筒の吊り紐の中に縫い込んでおくと、同胞の身でありながら鬼畜のようにあばき出しては没収するのだった。婦女には婦人の連盟員が身体検査をして帯